総ページ数：25 p

2022 年度

発酵メディア研究ゼミ論文

指導教員：チェン ドミニク

題目

# 「身体の意味づけを撹乱し、引き受けることの研究」

早稲田大学文化構想学部
表象・メディア論系
学籍番号：1T190904-4

目黒ほのか

# 概要（アブストラクト）

本論は、勝手に意味づけられる自らの身体を引き受けられないという筆者の課題に対し、身体像を多重にそなえたり、身体像と声をずらしたりして、他者による身体の意味づけに抵抗したり、攪乱したりする方針を試みるものである。本論において「身体を引き受ける」とは、自分が自分の身体で自分として生きていることを、他者による意味づけに依存せず、考え続け、実践することである。筆者は自分の「身体を引き受ける」ための手立てとして、衣服によって表現し得る身体像と、与えられた身体に依存する声に注目し、その関係について考え、問うような実践に落とし込み、実践の主観的な感想と、他者の反応について評価した。

結果として、主観的な感想としては、数日間にわたり実践を続ける中で、自分の声とずれている身体像に出会い、それが結び付けられるということを体験したり、日を追うごとに声と身体像とのずれに慣れていき、多重に多様な身体像を備えられるようになっていったりと、この試みが、他者による身体の意味づけに抵抗したり、錯乱したりすることに一定の効果を生んだ。

他者の反応としては、既に身体像の多重性や声とのずれに慣れている人にとってしか、筆者が提案するところの「身体を引き受ける」ための手法は深く納得されるものではなく、実践したいと思われるものでもなかった。

# 目次


1. はじめに ..... 1
1.1. 研究の動機 ..... 1
1.1.1. 身体を持って生きることへの嫌悪感 ..... 1
1.1.2. 身体を持って生きることを否定することへの嫌悪感 ..... 1
1.1.3. 性的に「される」こと ..... 2
1.1.4. 「身体を引き受ける」ための手がかり——衣服（身体像）と声 ..... 3
1.2. 研究の概要 ..... 5
1.3. 論文の構成 ..... 5
2. 関連動向 ..... 6
2.1. 他者による身体の意味づけに問いを持ち、時には抵抗する ..... 6
2.1.1. ジェンダー表現 ..... 6
2.1.2. 黒の衝撃 ..... 8
2.2. 他者による身体の意味づけに潜りつつ、攪乱する ..... 9
2.2.1. 声優の演じる「キャラクター」とはなにか ..... 9
2.2.2. 声優の特異な「身体」の多重性 ..... 10
2.2.3. 「声のデータベース」と「視覚的データベース」 ..... 11
3. 提案 ..... 14
4. 評価 ..... 18
5. まとめ ..... 24
6. 参考文献 ..... 25


# 表目次


表 1. 本論文の構成 ..... 5

# 1. はじめに

本論は、勝手に意味づけられる自らの身体を引き受けられないという課題に対し、身体像を多重にそなえたり、身体像と声をずらしたりして、他者による身体の意味づけに抵抗したり、攪乱したりするという手法を検討するものである。

## 1.1. 研究の動機

本章では、研究の動機を解説し、取り扱うテーマを明らかにする。

### 1.1.1. 身体を持って生きることへの嫌悪感

筆者は、自分の出生時に割り当てられた性別が女性であるがゆえに、「女性らしい」規範に押し込まれ、評価されることに強い抵抗感がある。この抵抗感は高校時代から顕著になったが、その理由としては、その年代において徐々に強く「女性らしくあれ」という要請をどこからか感じ始めたにも関わらず、自分の身体がいわゆる「女性らしい」規範に乗らないものだと思えたというコンプレックスが強くあったことがある。筆者の身体ならば、「女性らしい」ことこそが現代の日本社会において人に選ばれるためのあらゆる競争で勝ち抜く必須条件だろうと、知らないうちに刷り込まれていたため、主流な価値基準の中で自分の身体が評価されないであろうことは、その競争の中での挫折を予感させた。だからこそ、「女性らしい」規範の中で評価されないということは筆者にとって恐怖であった。しかし、簡単にその規範から降りることも困難に思われた。なぜなら、主流な価値基準を放棄することは、主流から外れ、評価される機会を著しく減らすことだと感じていたからである。そこで筆者は、「女性らしい」規範に押し込まれ、評価されるのは、筆者がこの身体を持って生きているからだとも考えるようになった。ゆえに、このことに自覚的になった当初は、自らの身体を肯定的に捉えることは非常に困難なことだった。

### 1.1.2. 身体を持って生きることを否定することへの嫌悪感

しかし、だからと言って、身体を持って生きることを完全に否定することはできなかった。なぜなら、まず第一に、身体があるからこそ自分は自分として意識されているし、身体がなくなったら自分はいなくなるのではないかと考えたからだ。第二には、身体があるからこそ、自分は単に物質として存在するというレイヤーを持ち、そこに立ち返ることによって付与された役割を降りる可能性を持つと考えたからだ。第二の理由について、この可能性は二つの側面を持つと考えた。一つ目は、それぞれが固有の身体を持っており、それは代替不可能な唯一の（本来は分類しえない）身体であると捉えられるという側面である。二つ目は、

単に生物として存在し、その種が存続するために方向づけられ、全体の中の代替可能な一としての身体であると捉えられるという側面だ。筆者にとっては、一つ目が望ましく二つ目は望ましくない、というのではなく、どちらの側面も、身体を持って生きることのうまみとしてあった。筆者の中には、唯一の存在でありたいという欲望と、代替可能な一として全体に回収されたいという欲望の、どちらもが確かに感じられていた。以上の理由で、筆者は、身体を持って生きることをやめたくはない。一方で、与えられた身体が、他者によって勝手に分類され、意味づけられ、役割を与えられることには、問いを持ち、時に抵抗したい。それは、自分が自分の身体で自分としてとして生きることを諦めたくないということだ。そして、他者による意味づけに乗っからず、自分の身体のことを自分で決めても、あらゆる機会を不当に失わないで生きていきたいということだ。筆者は、預かり知らぬところで与えられたこの身体を、どうにかして引き受けていきたい。自分が自分の身体で自分として生きていることを、他者による意味づけに依存せず、考え続け、実践する。このことを、本論文では「身体を引き受ける」と表現することにする。なお、筆者の考えるところの「身体を引き受ける」に近い内容として、ゲイル・サラモン著・藤高和輝訳『身体を引き受ける――トランスジェンダーと物質性（マテリアリティ）のレトリック』に、以下のように述べられている。

> 現象学は、自分自身の知覚が真理を決定する手段として最上位にある分野である。私自身の身体性――身体の形状、あるいは振る舞い――の現象学的様態はそれ自身、真理を構成するものとして解されている。このことは、私が自分の経験に引きこもって真理を構成したり、でっち上げたりするということを意味しないし、妄想にお墨付きを与えるわけでもない。このことが意味しているのは、私の身体の経験、その拡がりと効果に関する私の感覚、私が自分の身体を住み込みやすいものにするよう努める仕方、私が身体を用いる用途――あるいは、欲望の苦しみにおいては、おそらく、身体が私を用いる用途、というべきだろう――が、私がなんであれそれであるところの物質性への私の必然的な関係である、ということである。[1)]

### 1.1.3. 性的に「される」こと

筆者はなぜ、高校時代に「女性らしくあれ」という要請を徐々に強く感じ始めたのか。そして、「身体を引き受ける」ことに関する葛藤は、筆者だけが抱えているものなのだろうか。鮎川は、一般に「性欲」が、他の欲求と異なり第二次性徴で遅れてインストールされることによる混乱について、「私のトータリティ」[2)]という言葉を使って次のように述べている。

---

[1] ゲイル・サラモン著；藤高和輝訳『身体を引き受ける――トランスジェンダーと物質性（マテリアリティ）のレトリック』以文社，2019, p. 90.

[2] 鮎川ぱて『東京大学「ボーカロイド音楽論」講義』文藝春秋, 2022, p. 105.

> 欲望は、自分を駆動するエンジンです。食欲と睡眠欲をエンジンとする「私のトータリティ」がすでに完成していたのに、あとから性欲なる別のエンジンが追加される。「私のトータリティ」が、性欲なる新参者＝他者によって乱される。その他者の登場は、対自段階に到達していたかもしれない私の精神を、もう一度対他のステージへと引き戻すかもしれない。[3)]
>
> そして、その新しい欲望を満たすことは、私自身ではなく、私を部分とする全体＝人類種の維持に貢献する。つまり、性欲は「自分を部分とする全体」の欲望の代行者です。だから性欲自体が、こんなもの悲しいメッセージの伝達者なのかもしれません。「自分は所詮、より大きな全体のパーツにすぎない」。[4)]

鮎川は自らの内にある欲望の視点で「性欲」という言い方をしているが、他にも、例えば一般に第二次性徴を経て変化する身体が、他者に性的に見られはじめるようなことも、「私のトータリティ」を乱すこととして考えられるのではないだろうか。この言い方ならば、その人にいわゆる「性欲」があるかどうかやその度合いに関わらず、人間は身体を持つ人類種の維持のために、自らの意思の外で、遅れて性的に「される」のだと整理できるかもしれない。このことを踏まえると、筆者が高校時代に「身体を引き受ける」ことに関する葛藤を持ち始めたのは、その時期に、見知らぬ誰かに自分の身体を勝手に性的に「され」ていると自覚し始めたことが一因である可能性がある。筆者は身体を持っていただけだったが、性的に「され」た。つまり、身体を持って生きることは、意図せず性的に「される」ことなのだとも言えるのではないだろうか。そうであるならば、「身体を引き受ける」とは、意図せず性的に「される」身体を引き受けたいということであり、言い換えるならば、性的に「される」ことを、自らの意思の俎上に乗せようとすることなのかもしれない。そしてこのことは、身体を持って生きる誰にとっても、他人事ではないのではないだろうか。

### 1.1.4. 「身体を引き受ける」ための手がかり——衣服（身体像）と声

筆者は、「身体を引き受ける」ため、さらに言えば、性的に「される」ことを自らの意思の俎上に乗せようとするために、衣服は有用な装置であると考えている。同時に、衣服によって表現し得る身体像と、声との関係について考えることもまた、有用なのではないかと考えている。それぞれについて説明する。以降の筆者の論述の中では、「身体像」という用語を、衣服などによって表現し得る、身体に関する主に視覚的な表象を指すものとして用いる。

---

[3] 同書、p. 105.

[4] 同書、p.106.

まず衣服について、その人物の身体はその人物が選べるものではないが、衣服は選ぶことができる。与えられた身体がどんなものであるかに接しながら、その身体に纏う衣服を選ぶことは、自分で自分の身体のあり方を探ることとも言えるのではないか。さらに、衣服はそれ自体目に見え得る形を持っているため、比較的客観的に、自らの意思で選択し、自らの身体像として表現することができるものかもしれない。自分の思うその時の自分の身体のあり方を、衣服で比較的客観的に表現し他者に見せれば、それは他者への、自分はその時の自分の身体をこう捉えている、というメッセージになる可能性がある。場合によってそれは、身体を勝手に分類し役割を与えてくる社会に対して、静かに異議を唱える手立てになる場合もあるのではないか。したがって、衣服は、与えられた変えられない身体に対して、自らの意思で選択し、自らの身体像として表現し得るものであり、「身体を引き受ける」ための有用な装置であり得るかもしれない。

次に声について、声は、与えられた身体に依存して、内臓から発せられる。そのため、その人物の声もまたその人物が選べるものではない。しかも、それ自体に目に見え得る形があるわけではないがゆえに、身体に対する衣服のように、自他によってそれに外的なものを付け加えることによって表現を変化させることは、(特に対面上のコミュニケーションにおいては) 難しいものなのではないだろうか。したがって、声の表現が変化するときには、大抵身体自体が変化していると言えるかもしれない。つまり声は、裸の身体に依存している可能性がある。さらに言い換えるなら、声は、徹底的にすっぴんの身体のあらわれであると言えるのではないだろうか。しかし一方で、声は、聴こえる場合は無差別に、内臓から発せられる振動を持ってして鼓膜等に触れる、日常的に他者に開かれた身体性でもあるかもしれない。声を扱い/聴く者たちは、日常において数少ない、相手のすっぴんの身体に触れるようなやりとりの一つとして、声を交わしているのではないか。声は、私的に占有されていながら、公的に交換されてもいる、非常に生々しくその人物を代表する身体性だと言えるのではないか。以上の意味で、声は自他との関係の中で、その人の、私的なすっぴんの身体を、他者に代表する身体性として、流通することがあるのではないだろうか。

以上を踏まえ、衣服によって表現し得る身体像と、声との関係について考えることは、どのようなことなのか、整理したい。それは、他者との関係の中で、自分が自分の身体を自分としていかに捉え、表現するのかということと、自分のすっぴんの身体がどうであるのかということとの関係について考えることなのではないだろうか。しばしばこの関係は、「こういう捉え方・表現ならこういう身体であるはずだ」、あるいは逆に「こういう身体ならこういう捉え方・表現であるはずだ」というような規範に押し込まれているかもしれないが、だからこそこの関係について考えることが、規範を問い、ほころばせる契機になるのではないだろうか。まとめると、衣服によって表現し得る身体像と、声との関係について考えることは、自分が自分の身体を自分としていかに捉え、表現するのかということと、自分のすっぴんの身体がどうであるのかということとの関係について考え、その間にある規範を問うこ

とであり、「身体を引き受ける」ために、有用な手法であると捉えられるかもしれない。

以上のことから、本研究では、自分の「身体を引き受ける」ための手立てとして、衣服によって表現し得る身体像と、声に注目し、その関係について考え、問うような何らかの実践に落とし込み、その手法を検討することを目指す。

## 1.2. 研究の概要

本論は、勝手に意味づけられる自らの身体を引き受けられないという課題に対し、身体像を多重にそなえたり、身体像と声をずらしたりして、他者による身体の意味づけに抵抗したり、攪乱したりすることを試みるものである。筆者は、自分の「身体を引き受ける」ための手立てとして、衣服によって表現し得る身体像と、声との関係に注目した。本研究では、その関係を問うような何らかの実践を設計し、その手法を検討することを目指す。

## 1.3. 論文の構成

本論文の構成は以下に示す表 1 の通りである。

表 1. 本論文の構成

| | |
|---|---|
| 1. はじめに | 研究の背景、動機の説明および概要を提示する |
| 2. 関連動向 | 本研究に関連する声や衣服に関する実践の動向を解説し、本研究の道筋を示す |
| 3. 提案 | 本研究で提案する実践の設計プロセスを詳述する |
| 4. 評価 | 実践の主観的な記録と他者へのインタビューの分析を行う |
| 5. まとめ | 本研究の成果と課題、および今後の展望を示す |

# 2. 関連動向

本章では、「身体を引き受ける」ことを目指すために有用だと思われる、衣服によって表現し得る身体像や、声に関して、先行する事例を紹介する。もう一度確認すると、「身体を引き受ける」とは、自分が自分の身体で自分として生きていることを、他者による意味づけに依存せず、考え続け、実践することだ。筆者は、このための手法として、主に二つの方針があると考えた。一つ目は、他者による身体の意味づけに問いを持ち、時には抵抗するというものだ。二つ目は、他者による身体の意味づけに潜りつつ、攪乱するというものだ。

## 2.1. 他者による身体の意味づけに問いを持ち、時には抵抗する

まず、他者による意味づけに問いを持ち、時には抵抗するような事例について紹介する。ここでは、「ジェンダー表現」と、「黒の衝撃」について取り上げる。

### 2.1.1. ジェンダー表現

「ジェンダー表現」について取り上げるために、まず「ジェンダー」とは何かを説明したい。しかし「ジェンダー」は、一様な定義のあるものではなく、その説明は決して一つではない。例として、入門として平易に書かれている書籍三冊から、それぞれ説明を引用する。

はじめに、森山至貴『LGBT を読みとく――クィア・スタディーズ入門』では、以下のように説明されている。

> 社会は性別に応じて個々人に望ましい／望ましくない振る舞いを割り当てます。割り当てられたこの規範の性別による違いのことをジェンダーと言います。[5)]

また、同書では、異なる表現で以下のようにも説明されている。

> ジェンダーとは、私の側の事情と欲求にかかわらず、他者から男か女かを割り当てられ、それにふさわしい態度や行動をとるよう強制される、その現象のことを指すのです。[6)]

次に、アシュリー・マーデル著 ; 須川綾子訳『13 歳から知っておきたい LGBT+』では、以下のように説明されている。

> 個人の特性について用いるとき、「ジェンダー」はこう定義できます。男性である、女性である、その両方である、そのどちらでもない、両者の中間である、もしくはそ

---

[5] 森山至貴『LGBT を読みとく――クィア・スタディーズ入門』筑摩書房, 2017, p. 48.

[6] 同書、p. 49.

れらとはまったくちがう何かである状態。
社会的な文脈では、「ジェンダー」はこう定義できます。典型的には、個人を男性と女性のどちらか一方に属するものととらえ、その分類に基づき、役割や行動、表現、特徴に関して、特定の期待を抱く社会的分類システム。[7)]

最後に、鮎川は、前掲書の中で以下のように説明している。

「ジェンダー　gender」は、性自認、あるいは社会的性。本人が、自分の性別をどれだと自認しているかということです。社会、すなわち他者との関係の中で、自分がどの性別として振る舞うかということでもあります[8)]

この三つの例からは、「ジェンダー」と言ったときに、そこには少なくとも三つの要素を含むことが読み取れるのではないだろうか。一つ目は、他者から男性か女性かに分類され、それに基づいてふさわしい振る舞いを期待される、社会的なシステムのこと、二つ目は、自分の性別を自分でどう捉えているかということ、三つめは、「社会、すなわち他者との関係の中で、自分がどの性別として振る舞うかということ」[9)]だ。

この整理から捉えられることは、「ジェンダー」という言葉は、他者による意味づけがあると明らかにすることと、その意味づけに依存せず、自らのあり方について捉えた上で振る舞うことの、いずれを考えるときにも使われるものであるということではないだろうか。「ジェンダー」について考えること、さらに言えば「ジェンダー」という言葉それ自体が、自分が自分の身体で自分として生きていることを、他者によって意味づけされることに問いを持ち、時には抵抗する取り組みであるとも捉えられるかもしれない。

そして、「ジェンダー表現」とは、「自分のジェンダーを他人に伝える手段」[10)]で、「他人からどう見られたいか、どんなふうに呼ばれたいかを知らせる重要な合図」[11)]であり、「具体的な要素としては、服装や言葉づかい、しぐさ、声、香り、代名詞、メイク、アート、装飾、髪形など」[12)]である。前述の三つの要素のうちで言えば、三つ目の「社会、すなわち他者との関係の中で、自分がどの性別として振る舞うかということ」[13)]に近いかもしれない。

---

[7] アシュリー・マーデル著；須川綾子訳『13 歳から知っておきたい LGBT+』ダイヤモンド社，2017, p. 56.

[8] 鮎川、前掲書、p. 213.

[9] 同書、p. 213.

[10] マーデル、前掲書、p. 73.

[11] 同書、p. 73.

[12] 同書、p. 71.

[13] 鮎川、前掲書、p. 213.

「ジェンダー表現」は、その人の身体の性の特徴や、出生時に割り当てられた性別がどうであるかに関わらず、自分が自分のジェンダーをどう捉えるか、または他者に自分のジェンダーをどう見られたいかによってなされ得るものであり、そのための手段として、服装をはじめとする身体像は、大きな要素の一つであるだろう。したがって「ジェンダー表現」は、「身体を引き受ける」ために衣服などによって表現し得る身体像を取り扱う考え方の、一つの例と言えるかもしれない。

ただし、他者に自分のジェンダーをどう見られたいかということと「ジェンダー表現」が結びつくということは、こういうジェンダーならこういう「ジェンダー表現」である、という規範が存在することであるとも考えられる点には注意したい。筆者は、自らの性自認によって表現を規定されることに強い抵抗感を持っている。しかし実際は、その性自認「らしい」、規範的な恰好をすることが評価される機会が多いように感じられる。そしてこのことは、その性自認「らしくない」、規範的でない格好を安心して選べない状況をつくり出している。性自認がどうであるかによって、あるいは自分で自分の身体をどう捉えるかによって、安心して選び取ることのできる身体像の選択肢を規定されることは、本研究において目指すところではない。

### 2.1.2. 黒の衝撃

1980 年代初頭に、「COMME ges GARÇONS」と「Yohji Yamamoto」という二つのファッションブランドが登場したことは、「黒の衝撃」と呼ばれた。鮎川は「黒の衝撃」について、次のように述べている。

> 西洋の文脈において、ファッションの基本は「BWH をそのままに見せること」だとされます。その人が生まれ持っている身体のフォルムをそのまま美しく見せるのが基本であると。それに対して、日本のふたつのファッションブランドが、80 年代初頭にパリ・コレクションに参加し、世界的な脚光を浴びました。川久保玲というデザイナーによる「COMME ges GARÇONS」と、山本耀司による「Yohji Yamamoto」です。
>
> ふたつのブランドは、驚きをもって迎えられました。簡単に言うと、身体の輪郭をまったく出さなかったんですね。身体のフォルムを見せるという西洋ファッションの基本を真っ向から覆していた。（中略）どんな人が着ても同じシルエットが立ち上がる。各人の固有の BWH の差を隠蔽してくれるとも言えます。
>
> もうひとつ、当時の両ブランドの共通点がありました。カラフルな色を使うのではなく、黒を中心とした無彩色でイメージが統一されていたんですね。そのことをもって、このふたつのブランドの登場は世界の服飾評論家に「黒の衝撃」と呼ばれることになります。さらには、ある評論家はこのように評したと言われています。「性の喪に服

> している」。ほとんど文字通り「アンチ・セクシュアルだ」と評したわけです。アンチ・フィジカルでアンチ・カラフル。そんなアンチ・セクシュアルな表現を、「見られる」ことによって完成するファッションの世界で実現したのです。[14)]

BWH とは、バスト・ウエスト・ヒップのことである。「黒の衝撃」は、西洋の文脈で基本とされた、身体のフォルムをそのままに見せること、さらに言えば、身体が他者に性的に強調されるよう方向づけられていたことに、どんな人が着ても同じシルエットとなる無彩色のファッションによって抵抗したのだと考えられる。この例は、衣服によって表現し得る身体像の領域で、まさに他者による身体の意味づけに問いを持ち、抵抗するものだったのではないだろうか。しかし、他者による方向づけに問いを持ち、時には抵抗するための、衣服での実践として、身体のシルエットを一様にする、あるいは無彩色にすることしか選択肢がないのかというと、筆者はそうは考えない。例えば、多様なシルエットや色合いの身体像を多重に付与することによって、他者による身体の意味づけを攪乱するような手法もあるのではないだろうか。

以上、先行する、他者による方向づけに問いを持ち、時には抵抗するような事例について、僅かながら紹介した。

## 2.2. 他者による身体の意味づけに潜りつつ、攪乱する

次に、他者による身体の意味づけに潜りつつ、攪乱するような事例について紹介する。ここでは、声優について取り上げる。

### 2.2.1. 声優の演じる「キャラクター」とはなにか

声優は、キャラクターの声を演じている。このとき、キャラクターとは何だろうか。ここまで、性的に「される」ことや、ジェンダー、衣服について参照してきた鮎川は、声の問題についても大きな示唆を与えてくれる。前掲書の中で、鮎川は次のように述べている。

> 描かれたイラストと、それと無関係な人間の声。そのふたつを足し合わせたものを、キャラクターと言っている。我々が良くも悪くもひとつの身体によって統合されているのとは違って、分裂したふたつの要素を足し合わせたものがキャラクターです。[15)]

---

[14] 同書、pp. 287-288.

[15] 同書、p. 88.

つまり、分裂した「身体像」と「声」という二つの要素を足し合わせたものがキャラクターであり、声優はこのうちの「声」のみを担当する。これは、基本的には「身体像」と「声」が一致する俳優との大きな違いである。以上を踏まえ、声優の特異な「身体」の多重性について整理する。

### 2.2.2. 声優の特異な「身体」の多重性

声優は、俳優と異なる独自の特徴を持っている。それは、「『身体』の多重性」[16]である。内藤豊裕は、声優の「身体」の多重性について次のように述べている。

> 「声優」とは「一人の声に対して、複数の人物イメージが対応する」特異な存在である（中略）「声優」にのみ特異な現象は、本来は（特に生身の「俳優」では）不可分であるはずの（視覚的な）「身体」と（聴覚的な）「声」の不一致である。「声優」を論じる際、外的表象としての（視覚的な）「身体像」、あるいは想像によって補完される内的表象としての「身体像」と、「声」の持ち主の（実在的な）「身体」という「身体」の多重性の問題を切り離すことはできない。[17]

つまり、声優とは、一人の身体から発せられる声に対して、キャラクターの描かれたイラストの「身体像」と、声優の実際の「身体像」とが、多重に対応している状態だということだ。このことを指して、声優の「『身体』の多重性」と呼んでいる。例えば、アニメ作品のイベント等において行われることのある「生アフレコ」では、ステージに登壇した声優自身の実際の「身体像」が観客の前にあらわれているのと同時に、スクリーンにはキャラクターの「身体像」として描かれたイラストが映っている。そこで聴かれる声は、「『声優』の声であると同時に、『スクリーン上のキャラクター』の声としても受け入れられていることを見てとることができる」[18]という。

内藤は、実在する「声優」と実在しない「キャラクター」の「身体像」の多重性を指摘しているが、筆者は、それだけでなく、声優一人の声に対する「キャラクター」と「キャラクター」の「身体像」の多重性もあるのではないかと考える。この性質はやはり俳優よりも声優に多く見られるものであり、その理由としては、声優が俳優と異なり、その役柄に合わせて自身の身体像を変化させたり、保ったりすることに時間を割く必要があまりないため、あ

---

16 内藤豊裕「アニメ時代の「声優」の役割とそのメディア的構造の変化――日本における「声優」とは何か？（2）――」『学習院人文科学論集』25 号, 2016, p. 334.

17 同書、pp. 333-334.

18 内藤豊裕「日本における「声優」とは何か？：映画史の視点から」『学習院人文科学論集』24 号, 2015, p. 325.

る一定期間に演じられるキャラクターの数が俳優よりも多く、しかも複数のキャラクターを同時並行で担当することも比較的しやすいことが考えられるかもしれない。

したがって、声優は、一人の身体から発せられる声に対して、多様な身体像を同時にいくつも与えられる場合がある。言い換えれば、声優は、多重な身体のそれぞれによって、多重に役割を負う、つまり、多重に他者に意味づけられるのではないだろうか。黒の衝撃が、他者による身体の意味づけを問い、抵抗することで「性の喪に服す」[19]のならば、一人の声に対して身体像を多重に抱える声優は、反対に、他者による身体の意味づけを積極的に引き受けることによって、かえって身体象やそれに基づく役割を氾濫させ、他者によって付与されたはずの意味を攪乱する場合があるのではないか。

この性質を、声優ではない人でも簡易的に持ち得るものにできたなら、「黒の衝撃」のように身体のシルエットを一様にする、あるいは無彩色にすること以外にも、多様なシルエットや色合いの身体像を持つことを選択肢に残したまま、日常的に他者による身体の意味づけに抵抗することができるかもしれない。

### 2.2.3. 「声のデータベース」と「視覚的データベース」

また、声優は、身体象を氾濫させること以外にも、規範を問うようなあり方をする場合がある。それは、キャラクターの「声のデータベース」と「視覚的データベース」をずらす場合である。

「声のデータベース」と「視覚的データベース」の存在は、東浩紀によって論じられた「データベース」概念を基に、石田美紀が指摘した。東によると、「データベース＝設定」[20]である。石田は「視覚的データベース」について、東が指摘した、デ・ジ・キャラットを構成する「緑色の髪」「猫耳」「メイド服」「触覚のように刎ねた髪」「しっぽ」などの「萌え要素」は、キャラクターの外見を構成する視覚的要素であり、「視覚的データベース」と言い換えられるものであると述べている[21]。

また、石田は以下のようにも述べている。

> デ・ジ・キャラットの声優オーディションは、以下のことを示している。まずは、キャラクターの声に関するデータベース、つまりは「声のデータベース」からデ・ジ・

---

[19] 鮎川、前掲書、p. 287.

[20] 東浩紀『動物化するポストモダン　オタクから見た日本社会』講談社現代新書, 2001, p. 54.

[21] 石田美紀『アニメと声優のメディア史　なぜ女性が少年を演じるのか』青弓社, 2020, p. 149.

> キャラットの愛らしい容姿にふさわしい声が選ばれていたように、「声のデータベース」と「視覚的データベース」は緊密に協働するということである。[22)]

つまり、「データベース」の中には視覚的要素に関する設定と、声に関する設定があるということだ。そして、「視覚的データベース」と「声のデータベース」の間には、このような「身体像」にはこのような「声」がふさわしい、という強い結びつきが存在すると言う。この強い結びつきは、規範とも言い換えられるのではないだろうか。しかし、石田によると、声優は時に、「視覚的データベース」と「声のデータベース」をずらし、この規範を攪乱すると言う。石田は、声優である緒方恵美が『美少女戦士セーラームーン S』にて「天王はるか／セーラーウラヌス」を演じた例を取り上げ、次のように述べている。

> 緒方の演技は、蔵馬［『幽☆遊☆白書』のキャラクター：引用者注］よりも挑発的で自信に満ちたニュアンスが加えられているが、基本的には蔵馬を引き継ぐ少年キャラクターの声である。その直後、画面には短い髪、ネクタイ、そしてスラックスという視覚的造形が提示されるため、うさぎや美奈子、そして視聴者も、彼女を男子高校生として認識する。このとき、「視覚的データベース」と「声のデータベース」は協働し、視聴者の予測に応えてキャラクターを安定的に構築している。しかし、『美少女戦士セーラームーン』シリーズに欠かせない見せ場である戦闘場面になると、事情は変わる。セーラーウラヌスに変身したはるかは、セーラー服をアレンジしたミニスカートの衣装に身を包み、ティアラで額を飾る。と同時に、前述の場面よりもさらに低く、力強い声で必殺技の名前を叫ぶ。このとき、はるかを構成する視覚的側面（セーラー服調の衣装）と聴覚的側面（雄々しいまでの叫び）は、「女らしさ」と「男らしさ」をめぐる固定観念を攪乱する。ゲームセンターではるかが、視覚的にも聴覚的にもかっこいい男子高校生として登場したように、通常「視覚的データベース」と「声のデータベース」は協働し、視聴者の期待に沿ってキャラクターを構築する。しかし、この戦闘場面では「視覚的データベース」と「声のデータベース」は明らかにずれている。そのため、ミニスカート姿で雄叫びを上げるこのキャラクターは、視聴者の想定を超えた地点に立ち現れることになる。[23)]

このずれは、キャラクターが「視覚的側面と声を別々に制作され、そのあとで組み合わされる」[24)]がゆえに生じるものである。だからこそ、キャラクターの声のみを担当する声優は、時に「視覚的データベース」と「声のデータベース」のふさわしい結びつきを裏切り、視聴者の想定を超え、「身体像」と「声」の関係についての規範を攪乱する可能性が

---

[22] 同書、p. 151.

[23] 同書、pp. 166-167.

[24] 同書、p. 169.

ある。そして、声優のこのような実践は、役割を演じることによって視聴者の期待に応じ、他者による意味づけに潜るからこそ、裏切ることが可能となり、結果として規範を攪乱することができるのだと言えるのではないだろうか。

しかし、石田も指摘する通り、「視覚的データベース」と「声のデータベース」の合致が内破され、女性キャラクターの類型が更新される契機になったのは、女性声優による少年キャラクターの声という類型を更新した緒方の演技[25]であり、その声やその演技によって、革新的になされるような実践は、誰にでもできるものではないだろう。しかし、もし声がどうであるかや演技ができるか否かに依存しないかたちで、このような実践を日常的に実装できるような仕組みを考案することができたら、それは「身体を引き受ける」ため、つまり、自分が自分の身体で自分として生きていることを、他者による意味づけに依存せず、考え続け、実践するために、有用な手法になり得るのではないだろうか。

以上、先行する、他者による身体の意味づけに潜りつつ、攪乱するような事例について、僅かながら紹介した。

第二章では、「身体を引き受ける」ことを目指すために有用だと思われる、衣服によって表現し得る身体像や、声に関して、先行する事例を紹介してきた。「身体を引き受ける」ための実践の手法として、筆者は主に二つの方針があると考え、他者による身体の意味づけに問いを持ち、時には抵抗するという方針と、他者による身体の意味づけに潜りつつ、攪乱するという方針について整理した。

---

[25] 同書、p. 169.

# 3. 提案

第二章を経て、筆者の提案は次の二つである。

一つ目に、声優の、声というすっぴんの身体を他者に代表するような身体性に、身体象を多重に（同時に・いくつも）付与させる性質（≒「身体」の多重性）を、声優のように活動しない人でも簡易的に持てるかたちにできたなら、日常的に身体像を氾濫させることにより、他者による身体の意味づけを問い、時には抵抗することができるのではないか。しかもそれは、その身体の捉え方を限られた「らしい」身体像に結びつけることと逆行するため、安心して選び取ることのできる身体像の選択肢を規定されないまま実践できるのではないか。また、「黒の衝撃」のように身体のシルエットを一様にする、あるいは無彩色にすることとは異なり、多様なシルエットや色合いの身体像を持つことを選択肢に残したままで、他者による身体の意味づけに抵抗することができるのではないか。【提案①】

二つ目に、声優の、「声のデータベース」と「視覚的データベース」にずれを生み、「声」と「身体像」のふさわしい結びつきを裏切るあり方を、声がどうであるかや演技ができるか否かに依存しないかたちで簡易的に実装できる仕組みを考案できたなら、日常的に「声」と「身体像」の結びつきに関する偏見をあぶり出していくことにより、他者による身体の意味づけに潜りながら攪乱することができるのではないか。「声」と「身体像」の結びつきに関する偏見とは、自分のすっぴんの身体がどうであるのかということと、自分が自分の身体を自分としていかに捉え、表現するのかということとの間にある規範であり、この規範を攪乱することは、与えられた身体にふさわしいとされる身体像の結びつきを、絶対的な立場から引き下ろし、与えられた身体で自分が自分として選び取れる身体像の可能性を広げることになるのではないか。【提案②】

以降第三章では、以上の二つの提案を試みるための仕組みを考え、その経緯を書き記し、具体的な手法に落とし込む。

まず【提案①】について、試みるために必要な条件は、「声」に、「身体像を多重に（同時に・いくつも）付与させ」、「それを自他に認識される」ことである。

これらの条件をはじめから全て満たす仕組みを考えるのは困難であると判断し、まず要素を減らして条件を簡単にしてみる。試しに、「同時に」と、「自」を抜いてみる。つまり、「声」に「身体像を多重に（いくつも）付与させ」、「それを他者に認識される」場合を考えてみることとする。この場合なら、例えば、他者に対峙する一定の時間に、メイクや着替えなどによって何度も身体像を変えつつ、同じ身体として声で話すようなことが考えられる。この上で、「身体像を多重に（同時に）付与させる」という要素と、「それを自身に認識される」という要素をどう盛り込めるか検討する。「身体像を多重に（同時に）付与させる」という要素を満たすためには、同じ身体としての声が異なる身体像に結びついて複数存在す

る必要がある。声は、実際に生身の身体から発せられる場合には一重にしか存在できない。即ち、同じ身体としての声が異なる身体像に結びついて複数存在するためには、声は録音され、同時に複数認識できる状態になっている必要があるということになる。「それを自身に認識される」という要素を満たすためには、身体像は自身に見えるものになっている必要がある。身体像を自身に見えるものにするためには、例えば、目の前に鏡を置いたり、カメラによって捉えられ、その様子が同時に手元のモニターに映されたり、写真に撮ってそれを見たりすることが考えられる。

以上により、【提案①】を試みる仕組みに必要な条件のうちの二つが具体的になった。その条件とは、⑴声は録音され、同じ身体としての声を同時に複数認識できる状態になっていること、⑵鏡やカメラによって、身体像が自身に見えるものになっていることである。これを踏まえて、先の仮案に立ち返る。「他者に対峙する一定の時間に、メイクや着替えなどによって何度も身体像を変えつつ、同じ身体としての声で話す」という案に、条件⑴と条件⑵を適用させてみると、「他者に対峙する一定の時間に、メイクや着替えなどによって変えた身体像が、複数の録音された同じ身体としての声とそれぞれ結びついて聞こえるようになっており、その時々の自分の身体象が、鏡やカメラによって、自身に見えるものになっている」となる。

次に【提案②】について、試みるために必要な条件は、「声のデータベース」と「視覚的データベース」にずれを生む、つまり、「声」と「身体像」のふさわしい結びつきを裏切り、「それを自他に認識される」ことである。「声」と「身体像」のふさわしい結びつきを裏切るためには、「声」あるいは「身体像」のどちらかを、それまでのあり方と変えてみることが必要だ。ここまで述べてきたように、「身体像」は衣服によって、「声」よりも容易に変化させることができる。したがって、今回は「声」はそれまで通りとし、「身体像」を変化させるものとする。この場合ならば、具体的な手法として例えば、「他者の全身コーディネートを、普段その人が着ている衣服の中で、実験者が最も着ていなさそうなもの、という指定をつけ、一式を借りて着て、いつも通り喋ってみる」ことが考えられる。そして、「それを自他に認識される」ためには、【提案①】について検討した時と同じように、その時々の自分の身体象が、鏡やカメラによって、自身に見えるものになっていることが必要である。しかしこの時、自分で自分の顔まで見えてしまうと、「身体像」を変化させることに差し障るかもしれない。なぜなら顔は、自他にとって、かなり強くその人がその人であるという連続性と結びついている部分と思われるからである。顔を含んだ「身体像」をそれまでのあり方と変えてみるためには、その人がその人であるという連続性を薄れさせるような凝ったメイクをしなければならない可能性がある。しかし、メイクは衣服と違って簡単に着脱できるものではなく、施すために技術も必要となる。以上の理由により、この実践をより簡単に日常的に実装できるものにするために、自身の顔は自分でも見ないし、他者にも見せないことにする。

【提案②】について検討する中で新たに具体的になった要素は、次の 2 つである。⑶他者の全身コーディネートを、普段その人が着ている衣服の中で、実験者が最も着ていなさそうなもの、という指定をつけ、一式を借りて着て、いつも通り喋ってみること、そして、⑷自身の顔は自分でも見ないし、他者にも見せないことだ。これを、前述の案に付け加えてみると、「顔を見せず他者に対峙する一定の時間に、他者に借りた、実験者が最も着ていなさそうな全身コーディネートを着ることによって変えた身体像が、複数の録音された同じ身体としての声（いつも通りの語り）とそれぞれ結びついて聞こえるようになっており、その時々の自分の身体象が、鏡やカメラによって、自身に見えるものになっている。ただし、顔は見えないようにする」となる。この手法を整理すると、以下のような流れになるだろう。

・1 日 1 回、台本なしで 10 分程度自由な語りを収録する。
・この時、語る時の収録者のすがた（身体像/「視覚的データベース」）は、他者に衣服を借りることによって毎日変える。借り方は、身の回りの人物 5 名程度に、普段その人が着ている衣服の中で、収録者が最も着ていなさそうな全身コーディネート一式を借りることとする。
・収録時は全身鏡の前に立って、映っている身体像（＝収録者自身の声とずれるかもしれない、他者の身体像）を見ながら、収録者自身の声で自由に語る。
・収録時、収録者自身の顔は見えないようにする。
・収録初日と最終日は、収録者自身の衣服を着て収録し、他者の衣服を着ているときとの対比とする。
・自由な語りを終えた後は、その回を収録した感想を、固定の質問に答える形式で語る。記録のため、この語りも収録する。
・自由な語りと感想の語りのどちらもを、Podcast で一般に公開する。
・Podcast で一般に公開する際の、その回のアイキャッチビジュアルは、収録時のすがたの写真とする。
・収録音声は、少なくとも衣服の提供者 5 人程度に、聞いてもらう。
・その際、提供者に聞いてもらう音声は抜粋する。その仕方は、①収録者自身の衣服を着て収録した回、②その提供者の衣服を着て収録した回、③別の任意の提供者の衣服を着て収録した回の 3 回分から、それぞれ 1 分 30 秒前後抜粋し、計 4 分 30 秒程度にまとめるものとする。
・音声は、提供者に、一般に公開したアイキャッチビジュアル（その音声の収録時のすがたの写真）見ながら聞いてもらう。
・提供者に聞いてもらった後、参加した感想を聞く。

使用した固定の質問は、以下である。

【収録者向け感想記録用固定質問】

①収録してみて、語りづらかったか語りやすかったか。それはなぜか。
②鏡に映る自分の姿と、話しているときの自分の声にずれを感じたか。
③感じたとしたら、どんなずれか。なぜそう感じたと思うか。(普段の自分との対比か、昨日の姿との対比か等。)
④感じなかったとしたら、なぜそう感じなかったと思うか。(普段の自分との対比か、昨日の姿との対比か等。)
⑤ずれを感じた/感じなかったことについて、どう思うか。(嬉しいか、混乱するか、残念か等)
⑥ここまで回を重ねてきて、変化している感覚はあるか。
⑦その他気がついたことを自由に

【収録音声を聞いた人向けインタビュー質問】
※収録者：今回は筆者のこと
　提供者：このインタビューに答えている、服の提供者のこと
①音声を通して聞いてみて、収録者の声を収録者の声であると感じるか。
②提供者は、収録者が提供者の服を着た回の音声を、(収録者のその時の姿の写真を見ながら/想像しながら) 聞いてみて、どう思うか。または何も思わないか。(自分の身体イメージで、自分のではない声が話していることについて、違和感を持つか。自分の声の方がふさわしいと思うか。このずれについて、好意的に感じるか。否定的に感じるか。または、声と身体イメージがずれている状況について、想像しづらいと思うか。)
③音声を通して聞いてみて、声の感じは回によってどう違って、どう同じだと思ったか。
④日頃、身体イメージを多重に持ちたい (様々な恰好をしたい) と思うことはあるか。それはなぜか。
⑤今回の実験に参加して、④の考えに変化はあったか。それはなぜか。
⑥収録者に服を貸すことについてどう思ったか。(着ていなさそうな服を貸してほしいと言われて、どうやって服を選んだか。)
⑦その他気がついたことを自由に (この実験を通して、収録者や自分のことについて気付いたこと、変化したと感じたことはあるか。)

　以上第三章では、第二章を受けて整理した筆者の提案を、具体的な試みに落とし込んだ。次なる第四章では、実践の結果を示し、「身体を引き受ける」ために有用な手法であったか評価する。

# 4. 評価

本章で検証したいことは、考案した手法が「身体を引き受ける」ため、つまり、自分が自分の身体で自分として生きていることを、他者による意味づけに依存せず、考え続け、実践するために、有用なものであったかということである。検証にあたって、本研究では、a)主観的な気づきを取り扱うため、筆者が実践する中で感じたことをまとめる形式と、b)自分の制作に対する他者の反応を調べるため、制作を鑑賞してもらい、インタビューをとる形式の二つを採用することとする。

まず、考案した手法を筆者がどのように実践したか、簡単に整理する。

収録の実践をしたのは、2022 年 11 月 20 日から 2022 年 11 月 30 日までの 11 日間のうちの 9 日である。以下が収録時に着ていた衣服の記録である。



第 1 回（11 月 20 日収録）



第 2 回（11 月 21 日収録）



第 3 回（11 月 22 日収録）



第 4 回（11 月 23 日収録）



第 5 回（11 月 24 日収録）



第 6 回（11 月 25 日収録）




第 7 回（11 月 27 日収録）




第 8 回（11 月 29 日収録）




第 9 回（11 月 30 日収録）

当初は毎日実践し、自分の私服回を含め連続 7 日間で終了させる予定だったが、自由な語りをすることへの不安で序盤に練習として一回余分に録ってしまったり（第 2 回）、他者に服を借りる行程に手間取ってしまい、着る服がなく一日空いてしまったり、実践しているうちに、目をつぶって収録してみたらどうなるのだろうという好奇心が湧き、一回分割いてしまったりした（第 7 回）。収録の実践にあたって予想よりも困難だったことは、マイクに向かって自由に語ることと、他者に会って服を受け取ることである。前者について、筆者は以前にも Podcast を公開していたことがあり、ある程度慣れている方と考えられるにも関わらず、ほぼ毎日 10 分間自由に語るとなると、何をどんなふうに語ったらいいのかが分からなくなってしまった。しかしこれには、回を追うごとに慣れていった。具体的に言うと、音声を収録していない時間にも、語るための内容を無意識に探すようになり、収録を始めてから話題を見つけるまでの時間が、回を追うごとに短くなっていった。後者については、5 名のコーディネート一式を借りるために、まず 5 名の他者と予定を合わせて会うということが困難だった。このことは、例えばバーチャルな身体によって身体像を変化させる手法では起きなかっただろう。他者からその人の普段着ている衣服（≒身体像）を受け取る経験は、そのシチュエーションや会話が強く印象に残った。

## 4.1. a)主観的な気づきを取り扱うため、筆者が実践する中で感じたことをまとめる形式での評価

以降、評価を行う。まず、a)主観的な気づきを取り扱うため、筆者が実践する中で感じたことをまとめる形式で、実践を評価する。自由な語りの収録後に、固定の質問に答える形で感想を記録したため、その記録に基づいて、各質問への回答が回によってどう異なったかを整理する。

まず、「①収録してみて、語りづらかったか語りやすかったか。それはなぜか。」という問いについては、私服を着て収録した時に比べ、他者の衣服のうち、特に自分が普段着ないと感じた衣服を着ている場合に、語りづらくなることが分かった。逆に言えば、他者の衣服のうちでも、自身が普段着ていそうだと感じられるものについては、私服を着ている場合と同じくらい語りやすかった。ここで言う「語りづらい」とは、目に見えているこの服、その目の前の鏡に映っている服の人が、全く自分だと思えなくなってくる感覚であり、特に、私服を着た第1回と第2回を経て、初めて他者のから借りた衣服を着た第3回で、このことを強く感じ、感想パートで言及していた。そしてそれは、身体像の要素のうち、色のイメージや模様よりも、体型がどう見えるかということによって引き起こされていたと感じた。筆者の場合は特に、ボトムスによって自身の下半身がどのように見えるかが気になり、第3回、第6回において、顕著に下半身の見え方に違和感を持った。

「②鏡に映る自分の姿と、話しているときの自分の声にずれを感じたか。」という問いについては、第3回、第5回において、特に強くずれを感じた。逆に、第1回、第2回、第4回、第9回では、ずれを感じなかった。

「③感じたとしたら、どんなずれか。なぜそう感じたと思うか。」という問いについて、第3回、第5回において特に強くずれを感じたのは、まず第一に、問い①で整理されたように、衣服によって自身の体型がどう見えるかが変わったため、鏡に映る身体像が普段自分で持とうとしている身体像と離れ、それが現在の自分の身体像であるということに違和感を持ったということであると考えられる。そしてもう一つは、第5回において、映っている身体像が、筆者の中で強く、とある声に結びつきそうだと感じられるものだったことから、「視覚的データベース」と「声のデータベース」が強く結びついていると感じられる身体像の場合に、自身の声がその「視覚的データベース」に沿わないことを明確に自覚し、目の前に映っている身体像と切り離されているように感じることがあったと考えられる。

「④感じなかったとしたら、なぜそう感じなかったと思うか。」という問いについて、第第1回、第2回、第4回、第9回においてずれを感じなかったのは、それが普段自身の身体像として選んでいる衣服と同じ、あるいは近いものだったからだと思われる。第1回、第2回、第9回は筆者の私服を着用したため、普段自身の身体像として選んでいる衣服と同じであり、自分で自分の身体をこう表したい、ということとから離れなかった。第4回は他者に借りた衣服であったが、筆者の私服であっても違和感がないほど、形をはじめとする衣服の要素が自身で選ぶ衣服とよく似ていた。

「⑤ずれを感じた/感じなかったことについて、どう思うか。」という問いについては、特に第3回と第5回において、高揚感を感じた。それは、自身の声がその身体像に全く結びつかないと感じられるものであったにも関わらず、実際はそれが結びつけられるものであると理解することができたため、自分はこの身体で、この声で、こういう身体像を表すこともできるのだという、可能性の広がり、または、選択肢を奪還するような手ごたえを感じた

ということだったと思われる。

「⑥ここまで回を重ねてきて、変化している感覚はあるか。」という問いについては、回を追うごとに、身体像と声のずれを感じにくくなっていった。特に第 6 回では、他者に借りた衣服により自身の下半身の身体像が大きく変化し、違和感を持ったにも関わらず、第 3 回の時ほど強く声とのずれを感じることはなかった。これは、鏡の前で自らの身体像を見ることや、そこに映っている身体像が自らの声と結びついているという感覚に、回を追うごとに慣れていったためであると考えられる。

「⑦その他気がついたことを自由に」という問いについて、この実践の意図しなかった効果として、語っている自分と、衣服を借りた他者とは、収録時同じ空間にいないにも関わらず、語っている自分に干渉しすぎない形でその他者が並走しているような感覚を持ったことがある。収録時に自身が服を借りた他者のことを考えるということはほとんどなかったが、例えば少し身体を動かして、衣服の匂いがたつような瞬間や、服を借りた他者のよく使う言葉をふいに使ったような瞬間に、他者の身体の存在感や、その言葉を発しているときの声が挟み込まれるような場面が多々あった。このことは、自身の身体を振り返るにあたっても、ただ身体があるだけで、そこに纏われている衣服にその人でしかありえないような表象がしみ込んでいるということを実感する体験であり、「身体を引き受ける」ための別のアイデアかもしれないと思われた。

## 4.2. b)自分の制作に対する他者の反応を調べるため、制作を鑑賞してもらい、インタビューをする形式での評価

次に、b)自分の制作に対する他者の反応を調べるため、制作を鑑賞してもらい、インタビューをする形式で、実践を評価する。服を借りた 5 名のうち、4 名にインタビューを行い、固定の質問に答えてもらう形で反応を記録したため、その記録に基づいて、各質問への回答が人によってどう異なったかを整理する。インタビューにあたっては、前掲の図 1〜9 のように、身体像の写真とその身体像で収録した音声が同時に認識できるよう、Podcast のプラットフォーム上で音声を再生し、それを画面収録し、動画として鑑賞してもらった。

「①音声を通して聞いてみて、収録者の声を収録者の声であると感じるか。」という問いについては、4 名中 4 名が、そうであると感じたと回答した。人によっては、身体像を記録した写真の変化がなければ、一続きの音声であると感じた人もいた。

「②提供者は、収録者が提供者の服を着た回の音声を、(収録者のその時の姿の写真を見ながら/想像しながら) 聞いてみて、どう思うか。または何も思わないか。」という問いについては、写真と音声が結びついて考えにくかったという人が 2 名、結びついていたという人が 2 名いた。やはり、写真一枚を見せるだけでは、他者から見たときに、筆者の身体像を

声に多重に結びつけたり、結びついているはずだと感じられるがゆえにずらしたりするためには、不十分であった。収録者が提供者の服を着ていることについては、写真と音声が結びついていたという 2 名のうち、1 名は違和感を持ち、1 名は違和感を持たなかったと話した。違和感を持った 1 名は、自分の衣服が覚えのない写真に撮られていることにまず驚いたと話し、違和感を持たなかった 1 名は、貸した衣服は自分の所有権が薄れて、他の人が着ていても、そういう姿もあるだろうという風に受け入れられると話した。

「③音声を通して聞いてみて、声の感じは回によってどう違って、どう同じだと思ったか。」という問いに関しては、4 名中 3 名が、基本的に同じだと思ったと話した。基本的に同じだと答えなかった 1 名、第 3 回の衣服の提供者は、その回の内では変わったとは思わなかったが、他の回を聞いていると、自分が衣服を提供した回が一番喋りづらそうだったと感じたと話した。このことは、筆者自身の実感とも一致していた。その理由について、提供者は、実践の序盤で筆者がまだ慣れていなかったことに加え、その衣服が筆者にとって一番ずれの大きいものだったからなのではないかと指摘した。

「④日頃、身体イメージを多重に持ちたい（様々な恰好をしたい）と思うことはあるか。それはなぜか。」という問いについては、4 名中 1 名が、強くそうであるし、実践していると答えた。それは、収録者が提供者の服を着ていることについて違和感を持たなかったと答えた人物であった。その理由には、ジェンダー表現に関する部分もあると話し、筆者の持つ動機とも近いように思われた。提供者は、普段から自らの身体像を多重に備え、声と身体像がずれているあり方にも慣れていたために、収録者が提供者の服を着ている状態に違和感を持たなかったのではないかと考えられる。

「⑤今回の実験に参加して、④の考えに変化はあったか。それはなぜか。」という問いについては、この実験に参加して、より強く身体イメージを多重に持ちたいと思うようになった、と答えた人はいなかった。④の問いでも整理した通り、既に身体像の多重性や声とのずれに慣れている人にとってしか、筆者が提案するところの「身体を引き受ける」ための手法は深く納得されるものではなく、実践したいと思われるものでもなかった。このことについて、まず「身体を引き受け」たいという感覚を持っているかどうかという点と、自身の声がすっぴんの身体を代表するようなものであるという考えに馴染むかどうかという点で、4 名ともに違いが見られたことが理由であると推察される。筆者にとって、「身体を引き受け」たいということと、自身の声についての考えは、これまで相対化したことのないものであったため、単純な気づきだが、4 名それぞれが異なる課題意識や声についての考えを持っていることが理解できた。

「⑥収録者に服を貸すことについてどう思ったか。（着ていなさそうな服を貸してほしいと言われて、どうやって服を選んだか。）」という問いについては、4 名中 3 名が、筆者の着ていなさそうな服を貸すということを強く意識し、1 名が、時間の都合であまり意識しなかったと答えた。その 1 名とは、第 4 回の衣服の提供者であり、第 4 回は、筆者が、他者の

衣服でありながら身体像と声のずれを感じなかった回であった。このことは、提供者と筆者の選ぶ衣服が偶然似通っており、提供者は筆者の着ていなさそうな服かということを意識せず、普段からよく着る服を提供したということであったため、筆者は第 4 回において、他者の衣服であっても身体像と声のずれを感じなかったのだと考えられるだろう。

「⑦その他気がついたことを自由に」については、ある提供者が、貸した衣服を筆者が着用し語っている状況について、「親と先生が二人で話しているのを見ている時みたいな」感じだと述べたことを取り上げたい。このことは、自身の異なる側面を見せている二者（衣服と筆者）が、自分を含めずに会話している状況だったということであり、この構造は、筆者がこの実践の意図しなかった効果として述べた、服を借りた他者に干渉されすぎず、語りに並走されているような感覚と通じる部分があるように思われる。

## 4.3. 評価のまとめ

以上、a)主観的な気づきを取り扱うため、筆者が実践する中で感じたことをまとめる形式と、b)自分の制作に対する他者の反応を調べるため、制作を鑑賞してもらい、インタビューをとる形式で、実践の評価を行った。

結果として、主観的な感想としては、数日間にわたり実践を続ける中で、自分の声とずれている身体像に出会い、それが結び付けられるということを体験したり、日を追うごとに声と身体像とのずれに慣れていき、多重に多様な身体像を備えられるようになっていったりと、この試みが、他者による身体の意味づけに抵抗したり、錯乱したりすることに一定の効果を生んだ。具体的に言えば、自身の声がその身体像に全く結びつかないと感じられるものであったときでも、この実践によって、実際はそれが結びつけられるものであると理解することができたため、自分はこの身体で、この声で、こういう身体像を表すこともできるのだという、可能性の広がり、または、選択肢を奪還するような手ごたえを感じた。

他者の反応としては、既に身体像の多重性や声とのずれに慣れている人にとってしか、筆者が提案するところの「身体を引き受ける」ための手法は深く納得されるものではなく、実践したいと思われるものでもなかった。このことについて、まず「身体を引き受け」たいという感覚を持っているかどうかという点と、自身の声がすっぴんの身体を代表するようなものであるという考えに馴染むかどうかという点で、参加者それぞれに違いが見られたことが理由であると推察される。また、他者に対するこの実践の手法として、一種類の身体像につき一枚の写真を見ながら、同時にその身体像と対応する音声を聴き、その身体像と音声とを結びつけて認識してもらう仕組みは、身体像と声がずれて存在している状況に馴染まない人にとっては、困難なものであったことが分かった。この仕組みの部分については、今後検討し、修正することで、他者に身体像の多重性を示す、発展的な実践の手法として示すことができるかもしれない。

# 5. まとめ

本論は、勝手に意味づけられる自らの身体を引き受けられないという課題に対し、身体像を多重にそなえたり、身体像と声をずらしたりして、他者による身体の意味づけに抵抗したり、攪乱したりすることを試みるものであった。本論において「身体を引き受ける」とは、自分が自分の身体で自分として生きていることを、他者による意味づけに依存せず、考え続け、実践することである。筆者は自分の「身体を引き受ける」ための手立てとして、衣服によって表現し得る身体像と、与えられた身体に依存する声に注目し、その関係について考え、問うような実践に落とし込み、実践の主観的な感想と、他者の反応について評価した。

結果として、主観的な感想としては、数日間にわたり実践を続ける中で、自分の声とずれている身体像に出会い、それが結び付けられるということを体験したり、日を追うごとに声と身体像とのずれに慣れていき、多重に多様な身体像を備えられるようになっていったりと、この試みが、他者による身体の意味づけに抵抗したり、錯乱したりすることに一定の効果を生んだ。具体的に言えば、自身の声がその身体像に全く結びつかないと感じられるものであったときでも、この実践によって、実際はそれが結びつけられるものであると理解することができたため、自分はこの身体で、この声で、こういう身体像を表すこともできるのだという、可能性の広がり、または、選択肢を奪還するような手ごたえを感じた。

他者の反応としては、既に身体像の多重性や声とのずれに慣れている人にとってしか、筆者が提案するところの「身体を引き受ける」ための手法は深く納得されるものではなく、実践したいと思われるものでもなかった。このことについて、まず「身体を引き受け」たいという感覚を持っているかどうかという点と、自身の声がすっぴんの身体を代表するようなものであるという考えに馴染むかどうかという点で、参加者それぞれに違いが見られたことが理由であると推察される。また、他者に対するこの実践の手法として、一種類の身体像につき一枚の写真を見ながら、同時にその身体像と対応する音声を聴き、その身体像と音声とを結びつけて認識してもらう仕組みは、身体像と声がずれて存在している状況に馴染まない人にとっては、困難なものであったことが分かった。この仕組みの部分については、今後検討し、修正することで、他者に身体像の多重性を示す、発展的な実践の手法として示すことができるかもしれない。

# 6. 参考文献

-ゲイル・サラモン著 ; 藤高和輝訳『身体を引き受ける――トランスジェンダーと物質性（マテリアリティ）のレトリック』以文社，2019.

-鮎川ぱて『東京大学「ボーカロイド音楽論」講義』文藝春秋, 2022.

-森山至貴『LGBT を読みとく――クィア・スタディーズ入門』筑摩書房, 2017.

-アシュリー・マーデル著 ; 須川綾子訳『13 歳から知っておきたい LGBT+』ダイヤモンド社，2017.

-内藤豊裕「アニメ時代の「声優」の役割とそのメディア的構造の変化――日本における「声優」とは何か？（2）――」『学習院人文科学論集』25 号, 2016.

-内藤豊裕「日本における「声優」とは何か？：映画史の視点から」『学習院人文科学論集』24 号, 2015.

-東浩紀『動物化するポストモダン　オタクから見た日本社会』講談社現代新書, 2001.

-石田美紀『アニメと声優のメディア史　なぜ女性が少年を演じるのか』青弓社, 2020.